

この世にし楽しくあらば来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ

大伴旅人

『万葉集』巻三「酒を讀むる歌十三首」の一首。

破格のスケールの讃酒歌群であり、旅人の代表作である。

大宰府長官時代の宴席で、余興として披露されたとも、

その場の酔いにまかせて詠んだとも言われる連作であるが、それにしては綿密な構成であることから、官人に披露することを前提とした、きわめて文学意識の高い独酌詠ではないかとする説もあって、じつにじつに興味深い。

験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくある

らし

あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも

似む

黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするになほ及

かずけり

全十三首は、「かいのない物思いなどするより、一杯の



濁り酒でも飲むほうがましらしい」で始まり、七首目で

「ああみつともない、利口ぶつて酒を飲まない人をよく見たら、猿に似てるじゃないか」と放言きわまり、「黙つて

利口ぶるのは酒を飲んで酔い泣きするのに及ばないなあ」で終わる。酒を「聖」と言つた古の大聖人を讀める歌、なま

じつか人であるよりいっそ酒壺になりたいと嘆く歌もある。

掲出歌は十一首目。「今生に楽しくあるならば、来世には虫にも鳥にもなつてしまおう」という。酒は出てこないが、連作のなかで「楽しく」が酒を飲むことだと了解される。利那的な享楽主義とはちがう、自由な精神世界が感じられて魅力的な一首である。

「酒を讀むる歌」は、中国文学や仏典の知識に学び遊びつつ、一方で、藤原氏が強権をふるう世に遠く大宰府で宴する官人たちの哀愁をも代弁したにちがいない。この世の苦悩から逃れるため、酒に酔い理性を失くしてゆく男の姿は、おもしろくて悲しい。作中の人物は作られた自画像かもしれないが、旅人はやはり、おもしろくて悲しい男だったのではないかと思う。

(小島ゆかり)